

ゴルドン女史著
菅原教造譯述

美學講話

全十八講

『婦人と子ども』附録

第一講 入門

第二講 心像の話

第三講 感情の話

第四講 藝術の起原と職分

第五講 リズムの話

第六講 舞踊の話

第七講 音楽の話

第八講 色彩の話

第九講 線と形の話

第十講 圖案の話

第十一講 建築の話

第十二講 彫刻の話

第十三講 繪畫の話

第十四講 言語の話

第十五講 詩の話

第十六講 戯曲の話

第十七講 散文の話

第十八講 美と藝術

第四講 藝術の起源及び職分

目次

緒言——原始的活動と藝術の起源——戦争——獵狩及び他の産業——人を惹かんとする慾望——宗教的及び魔術的儀禮——自然に對する原始的態度——原始藝術に於ける暗示の力——リズムの効果——原始藝術の一般的職分——文明的活動と藝術の起源——藝術衝動——創作と鑑賞——美意識は無關心なり——美的價値は觀照的なり——美的判斷は客觀的且つ普遍的なり——文明藝術の職分——原始藝術と文明藝術との職分の差

緒言

本講に於ては、藝術的活動を誘致するに効果の有つた（やはり今も効果のある）個人的及社會的要求の主要なるものを擧げて述べて見たいと思ひます。

歴史を尋ねますと、人類文化のある所には、必ず藝術的職業もあつたと云ふ確かな證據があります。故に藝術製作の動機及原因は、必ずしも文華燦爛たる時代の特發では無く、これは全く人間の天性に基いて居るもので、人が生存し且周圍と對

抗しやうとする所には、必ず現はれて來るものと云はなければなりません。これから講を重ねて、各種の藝術の研究を進めて行くに就いては、先づその一つ一つの藝術の原始的形式に就て、お話を致さなければならぬのでありますが、今こゝでは各特殊の形式よりも、藝術全體として、其の起因動機及効果を述べる事に致したいと思ひます。そして此の原始藝術に關する大體の説明を終つてから、之と比較して、文明藝術はどんな職分を

有するかと云ふ問題を解く爲めに、文明人の藝術創作の動機を心理的に見て、其藝術衝動とは何であるかを述べ、以て作家と鑑賞者との態度を比較して其異同を明かにし、尙進んで鑑賞者の美意識の特徴を擧げて其大綱を説き、最後に創作活動と鑑賞作用との両面に亘つて、心理的及び社會的に、文明藝術の職分を述べ、尙之を原始藝術の職分と比較して、一層文明藝術の特徴を明かにしやうとするのであります。

原始的活動と藝術の起源

總じて野蠻人は

仕事に對して、何等の規律的習慣を持つては居りません。彼等は力を放出すると云ふ意味で働き、且困憊の極に達する迄、働き抜くものであります。扱て、どうして彼等がかう云ふ風な働きをするかと云ひますと、彼等をして其労働の努力を持續させるには、強い、而も極めて現代的な刺戟が、手近に無ければならぬのであります。獨逸の經濟學者のビュッヘルは、蠻人は努力を恐れずに、規則的と

云ふ事を恐れて居ると云つて居ります。

扱自然に刺戟になるの、中で、最も重要なものは、食物の缺乏、敵に對する恐怖、敵を掠奪せんとする欲望、異性を惹かんとする欲望、風雷雨電等の自然力に對する畏怖、及びさう云ふ力を制御しやうとする欲望等であります。斯様な自然刺戟、斯様な要求、及本能は、魚獵・獸獵・農耕・戰爭・宗教的又は魔術的儀體・外貌の裝飾・個人的腕力及巧智等の活動で満たされたものであります。故にかう云ふ事が、即ち蠻人の主要な仕事で、彼等の色々の藝術の形式は、是等の興味と相伴つて起つたものであります。

若し人間が、何時でもかう云ふ自然の變に對して、満足に應ずる事が出来たならば、決して自分の仕事の意味や目的を眞に認める事はありますまい。この變に對して應ずると云ふ事を、心理學的の言葉で云へば、刺戟に對して反應すると云ふ事になります。元來刺戟と反應とは、意識的交渉無し

にも起るものですが、併し反應が往々にして不足な事不十分な事があります。吾々は刺戟に對して殘る所なく十二分に反應し得ると限つては居りません。これ故に、要求に對して眞に満足に且有効に應せんが爲めには、豫め如何なる刺戟が來るかを知り、其れに對して發作的反應をするよりも寧ろ規則的反應に身を馴らして置かねばならないのであります。斯の如く、刺戟を先見して、其れに對する反應を調整すると云ふ事は、つまり理想を作つて、其れを充實させやうとするのと同じであります。例へば、自然に飢餓の迫るのを待つて其れから食をあさる衝動的企圖に従ふよりも、先見家又は理想家は、其の壓迫を豫知して、反應を改善しやうと努めます。如何なる團體の中でも、外の人より敏捷に適切に時に應ずる此の種類の人がある事は、よく人の知つて居る所であります。扱て此の種の人が、他人に其の言動を注意される様になれば、其人は首領なり藝術家なりになつ

たのでありまして、換言すれば、團體が模範を求めめる人は、其の團體の理想を具體化して居るものであります。即ち其人は「爲し能ふ人」物事を行ふ術を知つて居る人」と認められるのであります。故に一言にして云へば、原始藝術家は、身を以て模範とし、團體の活動を鼓舞し、調整した人なのであります。

戰爭

戰時に、出陣の舞や祝捷の踊をするのは、原始民族の風俗であります。彼等は争闘に取り懸かる前に、武器をひらめかし、恐ろしい関の聲を擧げ、精緻な步調を取つて、一緒に集まつて踊ります。實戰の場合になると、「先舞手」があつて、人を戦線に導き、且つ戦闘に於ける凡ての動作を無言で演じて見せました。此の身を以て示す模範は、戦はんとする欲望を刺戟し、且又色々な打ち方衝き方を見せるので、感情の上にも又技術の上にも、非常に有効なものであります。戦後に於ても、種族の行爲や大將の事業は、其れを眞

似た舞踊で頌揚されたものであります。斯様云ふ舞なり踊なりを示せば、戦争の記念ともなり、婦人を驚かせもし、將來の戦に對する欲望を戰士の胸に點するので、要するにいろいろ實際の目的に適つて居るのであります。

武勇を鼓舞する刺戟として、舞踊と共に、原始軍歌が出來て來ます。笛の音、太鼓の響、及其の種族の勇武を誇つた歌等の噪音は、種族的勇氣を鼓舞するに非常な力を持つて居りました。蠻人は「騒々しい者程正しい」のだと思ひ込んで居るらしく、彼等が高いリズム的な噪音を主とし、音楽や言葉は、何れかと云へば、寧ろ其の附屬物と成つて居ります。

野蠻人は、更に其の戰鬥力を増す爲めに、繪畫的技術をも利用いたします。例へば彼等は、種族の神や崇拜して居る動物の形を描いた軍旗を持ち出しますし、又銘々で外貌を飾つたり、武器・冑・楯などに飾装を施したりします。武人は青白い

戰用顔料で顔を彩るのみならず、眼をクマッと開き舌を垂れた、恐しい顔を楯の上に描いたりします。斯様云ふ事は、自分には勇氣を添へ、敵には威赫壓倒の趣を見せるのであります。さう云ふ隈取りや圖案は、たゞに敵に對してのみならず、時には彼等の假想の魔力に對しても、用ゐられるのであります。

狩獵及び他の産業

獵の名手の功績は、歌

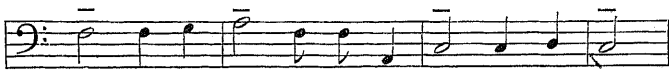
謠及默劇にして傳へられるので、即ち其の獵人が獲物を係蹄にかける時の舉動や、又は殺す時の動作や、其の狩られた動物の特徵的動作などが、再現されるのであります。此の自分で動物の眞似をすると云ふ事には、二つの目的があります。即ち一つには、狩獵家に禽獸の特質を呑み込ませ、又一つには、眞似した人は、その動物を手に入れることが出來ると云ふ妙な功德を信じて居つたが爲めであり、又其の動物の像は、お呪ひの爲めに、獵具の上に彫られたり、爪で描かれたりしました。

藝術と色々な仕事との關係は實に密接で、人智の發達せぬ時代には、非常に重要なものであります。長い單調な仕事をしてゐる時には、必ずそれに伴ふ舞踊及歌謠が發達します。手臼で穀類を挽いたり、紡いだり、織つたり、水を汲んだり運んだり、衣類を洗濯したり、葡萄壓搾器を踏んだり苗を植えたり、收穫をしたり、凡てかう云ふ産業は、各特殊の藝術的刺戟即ち歌なり踊なり拍子なりに依て勢を添へられます。

共同の仕事の必要な時、即ち重荷を持ち舉げるとか、重い物を引くとか、船を漕ぐとかの時には低級の種族間には、必ず先舞手の制度があります。其の人は、彼の戦争の時の様に、團體一同がしなければならぬ繼續行爲を、皆の爲めに先づ遣て見せ、又一同が一致して働ける様に、音頭を取ります。つまり其の運動の激勵者と整頓者なのであります。

此の符で示した掛け聲は、埃及のカイローで道を均らす人足が使つたものであります。音頭取り

は道具を取り上げて此の旋律を歌ひ、アクセントのある音符(揚音符)毎に、道具をドタリとおろすのであります。それから彼は、外の者が道具を取り舉げて、聲を揃へて同じ調子を歌ひ乍ら、手本通り揚音符毎に地均しをする間、待つて居ります。



人を惹かんとする欲望 異性を惹かんとする欲望、一般の稱讚を博し、且我乍らえらさうな感じを強めたい欲望などは、古い頃から、彩色・黠・亂刺・及び羽毛・具殻・齒などを連ねて懸けたりして、身體を飾る習慣を作りました。獨逸の藝術起源の研究者として有名な、又數年來我國に滞在して日本美術を研究して居るグローセの説に依れば、無機物に裝飾を施す様になつたのは、斯様云ふ裝飾

の用法が始まつてより餘程後であると申しませう。斯様云ふ外貌の裝飾は、單に直接の印象に

依て快感を起させるのみならず、往々其の裝飾の主が拔群の力を備へ、且特に熟練して居ると云ふ事を表はして居ります。例へば敵の頭皮の裝飾品は、勇敢な戰士たる證據となり、珍奇な鳥の羽毛を持つて居るのは、狩の上手を示し、又美事な疵跡きずあとの飾りは、其の人が非常な苦痛に堪へる剛毅な性質であると云ふ事を表はして居ります。

此の外貌の裝飾には、又他の動機も認められない事ありません。例へば黷及亂刺の圖案の中には、社會的結合を示す種族の象徴もあると云はれて居ります。併し上に擧げた二つの動機が主要なもので、畢竟眞に快感を與へる様な様子を作る事と、自分のえらさを證明する爲めなのであります。或種族には、愛の舞踊がよく行はれます。此の舞踊は、情緒を表出し、且外觀の美を示す爲めであると云はれて居ります。

教的及び魔術的儀禮

宗教的舞踊は、今

日では、以前考へて居つた程廣く行はれたのでは

無かつたと云ふ事になつて居りますが、兎に角、或種族の間には行はれたものであります。其の目的は、神又は惡魔を宥めて、其の助力好意を仰ぐのにあります。扱て原始的藝術と魔術の儀禮との關係はどうかと云ふに、これはよく證明が出来て居ります。原始的魔術の背後に潜むひそまな思想は、或人なり或物なりを自由にし支配しやうと思ふ時は、其人の姿とか、其人に關係の深い物とか、其物の一部分とかを、自由にすれば良い、と云ふのであります。

そして藝術を刺戟するに與つて力のあつた魔術の遣り方は、就中上に述べた繪、姿とか人形とかに關するものであります。即ちかう云ふ繪なり像なりに對して行つた事は、必ず原物自身に効力を及ぼす事が出来ること云ふ信念に基いて、魔術が行はれたのであります。無論此の信念は、極めて漠然としたものではありませんが、猶確固たる經驗、即ち畫像の靈的能力と云ふ事を、基礎として居るのであります。

歐洲人は、數世紀前までは、害を加へやうと思

ふ人の像を蠟で造り、これを火の前で溶かしたり、針を打ち込んだりして呪つたのは、丁度我國の藁人形と同じ事でありました。況や原始人民に於ては猶更の事で、畫像を用ゐる外に舞踊や演劇的所作で或物を眞似れば、其物自身を動かす事が出来ると假想して居りました。故に彼等は、冬を追ひ拂つて春を招するつもり of 所作を演ずれば、夏の來るのを早める事が出来る、又神に扮した人に、神にして貰ひ度い事をさせれば、其の望みが叶へられると思つて居たのであります。そして此の魔術の原則は、醫藥を司る人も亦用ゐたので、醫者が病人の看護を頼まれると、其の病氣の徴候を眞似たり、又病人がとりつかれて居ると想ふ惡靈の眞似をしたり致します。斯うして病を制したり、其れに打克つたりするつもりで居りました。是等の事實に依て、妖術は模倣衝動を刺戟し、且畫像舞踊等の製出を促すものであると云ふ事がよく分

かるのであります。

自然に對する原始的態度 古代藝術の起源

を述べるには、藝術産出の直接刺戟として、自然美の知覺を擧げるのが至當でありさうに思へませうが、併し實際は、原始人は近代人の様に無關心(第六十二頁參照)に、自然を讚美するなど、云ふ事は極めて稀か、又は絶無であつたのであります。

無論野蠻人とても、自然を觀察し且それに注意するに相違なく、殊に動物の生活にはよく氣を留めはしますが、併し其の興味たるや、十中八九迄、直接に實際の目的と決して切り放す事の出來ないものであります。次の獵人の歌は、原始人の自然の愛の性質をよく現はして居ります——

カンガルーはいと疾く走れり、

されど我更に疾く走りぬ。

カンガルーは肥えたり。

われ之を喰へり。

カンガルー！カンガルー！

蠻人が自然美の鑑賞を示して居る歌は、極めて

稀であります。野蠻人の自然現象に對する興味は單に自分に關係のある範圍に限られて居るのみならず、自然に對する概念は凡て擬人的説明であります。野蠻人はあらゆるものに自分自身の影像を被せて考へます。其の認める價值は、凡て自分もしくは社會と關聯して居ります。自然の風景を單に自然の風景として讚美する事は、個人的にも種族的にも後世に至つて發達したものであります。

原始藝術に於ける暗示の力

原始藝術の大

部を構成するものは、直接の個人的模範であつて之が暗示と成つて働いて、或必要な活動を刺戟するに到るものであると云ふ事は、種々の例を擧げて前に申しました。さう云ふ場合に、藝術家若くは最初の演技者は、行爲の模型又は像を作り、團體は模倣本能に従つて其れを其の儘寫し取ります。團體が現に爲す可き事を知つて居る場合ですら、左様云ふ手本を出せば、甚しく運動の効果が強められるのであります。

一定の連續的運動中、最初にする動作は、續いて起る第二第三のよりも弱いと云ふ事は、運動家はよく知つて居りますし、實驗に依つても確であります。之をもつと理論的に云へば、遣り始めの運動は、云はゞ有機體を温めると云ふ效があります。此の温めると云ふ働の最も重要な所は、運動の心像を一層明白に理解させると云ふ事であります。そして此の次に來る運動は、此の心像を基礎とし、是に依て維持されるものであります。

猶例を擧げて此の關係を申しますならば、競走者が馳ける時、步調を揃へて馳ければ速さが増すと云ふ事は、殆ど一般に通じた事實であります。其他自分の前に同じ運動をして行く人を見ると、自然に勢が附く物であります。要するに或行爲の心像を明白にし、且それに勢を添へるものは、凡て其の行爲を促進するもので、直接的確な模範は此の目的に實によく適つて居るものであります。即ち模範を示される時には、何等勘考の要もなく、

刺戟の適用又は其の意味を見出すに就ての軋轢もありません。只だ見たまゝを行れば宜いのであります。斯の如き、先導者に對する没頭、打解けた暗示を容れ易い態度は、此の原始的美的鑑賞法に必要な、唯一の心的過程と云ふ事が出来ませう。

リズムの効果

模倣されるものが、リズム

的性質のものであるか、又は遂にはリズムとなる迄規則的に間をおいて反覆され、ば、模倣的傾向に到底釣り込まれずには居られません。最初のうちの暗示は、よく拒み得た人ですら、長い間リズム的に繰り返されるのを見れば、必ず引き込まれて、其の運動を眞似する様になります。

原始的藝術に於けるリズムは、今述べたやうに、個人に對して刺戟的效果があるのみならず、共同して働く人々の動作の調子をとり、其の努力の効果を一層多く致します。例を擧げるならば、太鼓を打てば、行進に活氣が添ふと同時に、それを整頓致します。又ポートを進めるには、漕ぎ手の調

整が必要であり、綱引きが一整に引けば、力がすつと強くなります。大抵の共同の仕事をする時には、規則的なリズムが、完全な結果を得るに最も有効な手段であります。リズムに就ては、猶次講に精しくお話致しませう。

原始藝術の一般的職分

上述の通り、原始

藝術の一般的職分は、野蠻人の生活の實際的活動を鼓舞し、且其れを調整するに在りました。故に藝術は特殊の方向に於ける（即ち或る専門の事柄に就ての）力を高めんが爲めの考案の原則であると云ふ事が出来ます。此の特殊と云ひ専門と云ふのは、つまり藝術品の製出を促した起因に就ての問題でありまして、ビュッヘルは、藝術品と其起因との間の密接な關係に就て、次の如く述べて居ります——冬期に於て、ブルガリアの百姓に、收穫の歌を謡つて呉れと頼めば、時節でも無いに其んな歌を謡ふ事はないと必ず答へやう」と。即ち此の百姓達は、其の歌と、歌の社會的起源とを、離して

考へる事が出来ないのであります。

要するに最古の藝術は、舞踏・默劇・歌謠等に依りて直接に人に訴へ、且人身で模範を示すのを法則として居りました。其等の技術を通じ、又其の身體及所有物の裝飾を通じて、藝術家は公衆に其の個性を印象するのであります。約言すれば、往古の藝術は社會的目的を助け、同時に藝術家の勢力を或程度迄表現し且保存したのであります。

文明的活動と藝術の起源

原始活動と文明

活動間の第一の相異は、約言すれば分業及勞役者の専門化であります。原始社會に於ては、其の事務が同種であつた爲めに、凡ての人に對する理想が唯一つでありました。たとへば誰も彼も武士であり、狩獵者であつたので、結局腕力と巧智とが絶對の徳として稱へられたのであります。つまり文化の幼稚な時代ほど、似たり寄つたりの型の人が多いのであります。然るに社會の發達に伴つて、職業が多種多様となり、別々の職業に對する

別々の團體の盡力は、別々の階級と型との發達を促して來るやうになるのであります。そして近世の學說に依れば、此の専門化の傾向は、まだく餘程進みさうな勢があります。

野蠻人と文明人との間の第二の重要な相違は、文明人は嫌な仕事に堪へる能力がある點であります。即ち文明人は勞役の習慣を持つて居りまして、常に何等の感覺的刺戟が無くとも、活動を續ける事が出來ます。是は文明人は何等刺戟なしに遣て行かれると云ふ意味ではなく、彼等をもつと遠い刺戟を受ける事が出來るといふ意味であります。即ち將來の爲めと云ふ思想は、十分に近代人を働かせる所以でありまして、或は何年か前に云はれた言葉に勵まされる事もありますし、又自分とは丸で異つた仕事をして居る人の例に依て鼓舞される事もあります。簡單に云へば、文明人は刺戟を廣い範圍から得る事が出來、又自分の仕事とは性質の異なる物からも、時を隔てた事からも、刺戟を受

ける事が出来るのであります。

近代人の活動が、斯様に複雑を極めて居る爲めに、従つて近代藝術も亦、仕事の範圍がずつと廣くなつて居ます。少くとも理論上からは、あらゆる人の生活は、皆藝術に對して機會と材料とを與へて居ります。即ち近代藝術家は、遙に廣大な公衆、遙に多種の興味を有する公衆を控えて居ります。

此の二つの條件は、二つの相異なる結果を生じます。即ち第一に、藝術家は公衆の雑多であると云ふ事を構はずに、あらゆる人の性情に共通の問題をえらぶか、又は第二に、公衆の興味の廣さを頼んで藝術家が其の特殊の個人的經驗を述べるかであります。本講の最後の二節に於て申しますが、此の二つの傾向は、決して兩立し難いものではありません。

要するに右に述べたやうな近代的文明から生じた状態の變化によつて、やはり文明藝術家と文明の公衆との精神上にも變化がおこつて來るものと

見なければなりません。即ち文明藝術の特徴と云ふものがあらはれて來なければなりません。扱ふその變化はどう云ふものであるか、これを述べる豫備として、先づ第一に藝術創作の根本問題に入つて、藝術衝動の如何なるものかを説き、つぎに美的鑑賞の意識に及んで、その主要なる特徴を述べ、最後に愈々本問題に立入つて、文明藝術の職分、及び其の原始藝術の職分との差を擧げて、文明藝術家と公衆との態度に就ての説明を試みやうと思ふのであります。

藝術衝動 創作衝動とは如何なるものか。

藝術家の態度と鑑賞者の態度とは、如何に類似し又如何に異なるか。この二つの問題に對する答を得る前に、まづ知つておかなければならないのは、藝術製作者とは、必ずしも大天才に限る譯では無く、誰に依らず、眞面目に何等か藝術的な事をしやうとした事のある者を、皆含んで居る事であり、ます。これは殆んどあらゆる人を意味して居りま

す。瑞典の有名な藝術起原の研究者たるヒルンの言に、「藝術の概念を最も普遍的な意味で考へれば、凡ての健全な人は、少くとも其の生涯の或時は、能力に於ては兎も角、向上心に於ては、藝術家たるものである」と云つて居ります。

是から愈々創作衝動とは如何なるものであるかと云ふ事に就て御話いたします。元來藝術家に藝術製作を促す動機は色々有りませう。例へば戀愛・競争・金錢等外的の動機も無い事はありませんまい併しさう云ふものとは別な、純然たる藝術の爲めの藝術と云ふやうな動機からも創作を致しませう。或は又內的の藝術衝動に依て、藝術製作が動かされる事も有るのであります。扱て此の衝動とは如何するのでありませうか。

獨逸の大詩人にして且つ美學者たるシルレルは藝術衝動を遊戯本能の發現したものととして、其の自然な自由な性質をよく認めました。此見解は後に、英國の哲學者スペンサーが取り上げて、一層

發達させました。此の人々の意見に従へば藝術は遊戯の成熟せるもので又餘剩精力を統管する手段であると云つて居ります。

是に對する反對說中、次の二つが重立つた者であります。第一説は藝術も遊戯も共に、餘剩精力の安全瓣とも排水溝とも認める事は出来ぬ。それは斯様云ふ活動は、實際遊戯者又は藝術家が、餘分の精力を持つて居らぬ時にも行はれるからであると説くのであります。又第二説は、藝術と遊戯との動機の差、及び製出に關する相違を論據として居ります。精しく申しますならば、遊戯衝動は遊戯の實際過程が完了する時に、満足されませんが、藝術衝動の方は、單に過程を要求するのみならず、製出の行動が完了した後までも永續する或特殊の産物をも要求するものであります。瑞典のヒルンは、此點をよく言ひ當て、居ります。

外にも、藝術衝動の性質に關する學說があります。即ち、藝術は摸倣衝動の發露であるとする希臘

の哲學者アリストテレス以來の説もあり、又他を悦ばせて以て人を惹んとする欲望に出て居ると云ふ米國の美學者マーシャルの考もあり、又自我表示の欲望に基くものであると云ふ米國の心理學者ポールドウインの思想もあります。是等の説は、それ／＼眞理を含んで居るには相異ありませんが、併し最も卓出して居るのは、藝術衝動は情緒を客観化せんとする欲望であると云ふヒルンの説明であります。

此の説で云ふと、藝術衝動は其人自身の情緒的經驗を永存せしめんとする欲望であると云ふ事が出来た。たとへば我々は特に意味のある瞬間、奇異な哀しみ、興趣に富む悦びなどを經驗すれば其れと記し留めて置き度くなるのが普通であります。扱物を記すに唯一の確な方法は何かと云ひますと、自分自身を、永久的な若くは再生し得べき印象を留める様な（殊に他人に共に印象を留める様な）形にはめ込む事であり、要言すれば快感を

與へるやうな形式は、左様云ふ不死不朽を得るに最良の方法であります。ヒルンが「最も效力強き藝術品とは、或一人が其作品によつて動かされて居ると同じ情緒的狀態を、段々多くの同感者に傳へ得るものと云ふのである」と説いて居るのは、よく此の點と云ひ現はしたものであります。尙この事實は、日常の經驗に徴しても明かであります。

たとへば我々が自分の經驗を人に傳へる時にどうするかと云ふに、他人が聞いても、自身が後でそれを經驗して見ても、要するに其の經驗の瞬間が再生する位に、又之を味つて見て尤もと思はれる際まで、シツクリとよく合つた仕方遣り度いと思ひます。更に進んでは、其れが他人の感情及行爲に迄影響を及ぼす様な方法で、遣り度いと思ひます。斯の如く我々は、自分の事柄、自分自身の情緒を、重大なものとして確定したのであります。これが即ち情緒の客観化と云ふ事であり、

創作と鑑賞

以上を以て創作衝動に關する

大體の話を了りましたから、次に藝術家の態度と鑑賞者の態度との異同に就て、申上げて見たいと思ひます。

或意味に於ては、藝術家の意識は、單に藝術家の作物を鑑賞するに過ぎぬ鑑賞者の意識より廣いと云ふ事が出來ます。如何となれば、作家は自身自身の思想を具體化するに先立ちて、それを味ふ態度を先づ持つて居る筈で、即ち作家は先づ其の思想を暗示した四圍の或事物に對して、美的な心のときめきを感じる筈であります。併し又他の意味に於ては、鑑賞者の態度の方が廣いとも云ふ事が出來ます。其れは單なる鑑賞者は受動的即ち受け身であつて、作家のやうに能動的製出から來る無感又は鈍感の作用、即ち馴れて順應すると云ふ弊を蒙らず、且藝術品の批評をするに都合の好い印象を廣く集める餘裕があるからであります。

無論右に擧げた創作と鑑賞との二つの態度は、理論的に分けたものでありますから、實際上では

此の二つは交互に又入り交つて相働いて居ます。即ち製出者は、其の印象の範圍が廣く且多様であるだけ勝れた藝術家であり、又製作を試みた鑑賞者はそれが爲めに美の要素に對する觀察が、非常に鋭くなつて居ります。而も猶一方は受け身であり、又一方は自分の思想を人にも分けやうと云ふので勢ひ發表的であります。

次の三項に於ては藝術品を鑑賞するに當つての觀察者の見地に就て、述べて見たいと思ひます。通常鑑賞者の美意識は、第一に感情の方面より見て、無關心であり、第二に知的作用の方面より見て、無關心であり、第三に社會的方面より見て客觀的であると言はれて居ります。以下項を追うて説明致します。

美意識は無關心なり

美意識の特徴を、第

一に其感情の方面から見れば、無關心と云ふ事になります。元來人には物に對する色々な興味を感じ方があります。例へば林檎ならば、飢えて居る

者には、當然食べる爲めの物であり、腕白な兒には、投げたり受けたりするためのボールであり、又美術の學生には、寫生のモデルとも見えませう。

此の場合には、各々其の林檎を、自分自身の目的を達する手段に用ゐやうとして居ります。所がこゝに第四の人が居て、其人は、林檎を單に林檎として興味を感じて居る許りで、故ら私用に供するつもりではないと致しませう。此人は取りも直さず美的態度の一徴候を備へて居るのであります。次に林檎の代りに一枚の繪で考へて見ませう。單に一枚の紙としては、火を起す爲めに燃やす事も出来る、物を書く事も出来る、窓の隙を塞ぐ事も出来ます。併しさういふことをすれば、誰でも直ぐその繪は酷いことをされた、不相應な目的に使はれて、ほんの道具とされたに過ぎぬと感じます。こゝに唯一つ至當と認められるのは、繪をそれ自身一の目的と認めると云ふ、即ち無關心(利害の關係を無くした)の態度であります。

無關心なる興味とは、直接の私の目的を飽く迄も對象其物の暗示する目的に従屬せしめんとし、又は少くとも、もつと遠大な私の目的に隸從せしめんとするものであります。言はゞ公平なる友情とも比すべき此の藝術品に對する感情は、「主體が對象に没入する事」として、説かれて居るのであります、つまり欲望を離れ意志を没した状態として感ぜられ、從て自我を服從せしめる事、若くは純然たる實利又は一身的興味を抛つ事に當りますから、此の状態を没意志とも、脱實とも、離我とも、或は實在感(實感)の遊離とも稱へます。要するに斯う云ふ名は、皆美意識を消極的に見て付けたものであります。

次に此の無關心の感情状態を、積極的に見てどう云ふ名が付いて居うかと云ふと、慾望・意志・激情・情緒等を免れた斯う感情状態は、種々の學者によつて、輕快の感とも、自由解放又は遊離の感とも、靜觀性とも、假感(假象感情)とも、移感(感

情移入)とも、對象的感情とも呼ばれて居ります。輕快・自由・靜觀は、共に意欲や情緒の動亂を免かれた状態を指して云つたものであります。假感と云ふ語は、獨逸の哲學者のハルトマンが創め、遊戯論の著者として有名な獨逸の美學者グロースがやはり今も用ゐて居る用語でありまして、實在感の遊離と云ふ事を、積極的に見て付けたものであります。現今獨逸の一流の美學者たるリップスの創めた移感又は感情移入と云ふ用語は、やはり現今リップスと併び稱せられて居るフォルケルトの創めた對象的感情と、用じ意味のものであります。自分の感情を投出して對象にさう云ふ感情が備はつて居ると見るから對象的感情であり、又自分の感情を對象に移し入れて對象に自分が同情して之と同じ心持になるから感情移入であります。何れにしても感情である以上は、やはり自分自身の感情に違ひないのでありますけれども、之を自分の感じとは思はずに、對象が有する感情として鑑賞し

て居るのであります。たとへば二拍子のリズムは堅實であり、三拍子のリズムは輕快であるやうにリズム其者にさう云ふ感じが備つて居るとして之を味つたり、垂直線には堅固・確實の感が備はり、斜線には滑動的・落下的の意が附着して居る様に感ぜられたりします。又マリヤの泣いて居る繪を見れば、やはり其作品中の人物の有する悲哀の感情を鑑賞者が味ふと云ふ風になるのであります。

美意識は觀照的なり

美意識の特徴を、第

二に其知的・認識的の方面から見れば、觀照的(又は直觀的)と云ふ事であります。元來美に對する我々の嗜好は衝動的であります。もつと精しく申せば、對象が吾々の官能に訴へる處に、主として美意識上の根據があるので、其他には根據を持たず、又持つに及ばぬのであります。もつと碎いて云へば、活きくした、ありくとした、具體的の官能的の經驗を必要とするのであります。これが即ち直觀的又は觀照的と云ふ事で、別言すれば直接的で

あつて、推論的でない」と云ふ事でありませぬ。つまり其の嗜好には理屈から割り出した結論とは違つて前提がないのであつて丁度真理の直覺の様なものであります。故に徳義上の是認とは全く別で、決して法規を遵奉した様な感じはせず、たゞ良心の推察と同然に自然的直覺的なのであります。換言すれば、美的鑑賞は、和解せられ又は推論せられたる價值では無くて、直接的な價值の感じであります。

以上の理由から見て、第一に、感覺は、藝術に於ては常に大切なもので、此の官能に訴へる事に依つて、藝術は推理的でなくして、直接な本能的評價に訴へるものであると云ふ事を忘れてはなりません。故に繪畫にせよ、建築にせよ、彫刻にせよ、又音樂にせよ、舞踊にせよ、演劇にせよ、要するに之を味ふ時の我々の經驗は、悉く感覺に訴へますから、従つ具體的觀照的でないものはありません。

併し此の觀照的であると云ふ事を、餘り極端に取つてはいけません。美しい物には、決して何等の

聯想も知的暗示も無いと云ふ譯ではなく、たゞさう云ふものは、美意識の隨一の根據でもなく原因でも無いと云ふ事を、強めて云つたのであります。

故に第二の大切な條件として奉げなければならぬのは、心像であります。第二講第十頁以下、殊に第二十頁に於て、精しく述べましたやうに、心像は感覺の再現したものでありますが、或は人により又は時と場合によつては、實際の感覺と違はない程明瞭に現はれて來るものであります。感覺に亞いで、觀照的具體的の價值を有して居るものであります。文學上の作品を味ふ時の經驗は、全く此の心像を中心として成立して居るものである事は、改めて申上げるまでもない事と思ひます。勿論作品に依つては、或は人生問題、或は婦人問題と云ふやうに、理論的・抽象的な或る思想なり主義なりを、述べるには相違ありませんけれども、文藝上の作品に於ては、決して科學者や哲學者のやうに、理論を理論として述べるのではなく、た

とへばフアストなりノラなりと云ふ或る特殊の具體的の人物を點出して來て、かう云ふ觀照的の手段即ち心像と云ふ運般器に依つて、其思想を讀者に味はせやうとするのであります。

觀照的と云ふ事に付け加へて述べて置きたい事は、美意識に於ける運動的傾向と云ふ事でありませぬ。第三講で情緒の御話をした時に、總ての意識は運動的傾向を持って居ると申しましたが、美的鑑賞の高潮に達した時には、殊に其事實が顯著でありまして、運動感覺と有機感覺が活動するのであります。此の點を力説して居るのは、英國の女流美學者リーと、獨逸の美學者グロースであります。此運動的狀態に就ては、後に各個の藝術を述べる時に、多く御話しやうと思ひます。

美的判斷は客觀的且普遍的なり

美意識の

特徴を、第三に社會的方面から見れば、客觀的及び普遍的と云ふ事であります。元來客觀的である物は、鑑賞者が何人であるに拘らず、鑑賞者と獨

立して存在せねばならぬ筈、即ち甲に對しても乙に對しても同様の結果を生ずべき筈であります。別言すれば、鑑賞者は移りも變りもしませうが、客觀的事物は其儘でなければなりません。

事物に對する鑑賞者の信念は、其物に對する他人の信念即ち社會的の信念に、據る所が深大であります。もつと精しく云へば、もし或人が或物を觀たと云つても、自分同様それを觀る機會のある人が、皆一樣に其様なものは其處には無かつたと云へば、當人は自分の感覺を疑ひ始めます。要するに實在性とは、究極は社會的の問題でありまして客觀的方向に於ける人の信念は、輿論と同化して了ふものであります。それ故若し一つの物が、多數の人に存在すると思はれるとすれば、唯一人の人に信せらるゝよりも、ずつと實在性の度が増して居る譯であります。

此の原則を美的對象に應用しますと、「多數に美しく見えるものは美しいものである」といふ事が

出來ます。言ひ換へれば、或物が社會一般に多く認められ、それ丈けで、其物は存在して居るとも、其物は美しいものであるとも云へるのであります。併し果して幾人の人が、此の後楯うしろだてを成すに必要であるかは正確に申せません。猶亦多數の方が誤つて居つて、少數の方が正しい事も無いには限りません。しかし少數と云ふ事自身が、矢張社會的團體なのでありますから、やはり客觀的及一般的のものを云ふ時には、必ず社會的關係がはいつて來るのであります。

要するに美意識は客觀的且普遍的であると云ひますのは、美しい物を鑑賞する時、我々は現に社會的判斷たり、又は他日社會的判斷たるべきものと一致して居り、斯くして直接種族の生活を分有して居ると云ふ事でありませう。そして又他の一面から云へば、美感以外の快樂例へば食物の如きは、只だ一人でしか消耗する事が出來ないのに、美しい物は同時に大きな團體が分有する事も出來

ると云ふ意味に於ても、普遍的であります。

客觀的と云ふ事に付け加へて、申上げて置きたいのは、美意識のもう一つの特徴として、非常に暗示を受け易いと云ふ事でありませう。極めて愛す可き物の前に在ては、人は子供のやうになつて、其の與へる如何なる暗示をも受け容れるものであります。併しこれは感情の客觀性と其の無關心と云ふ性質の一面に過ぎないのでありませう。兎に角自製の根源が一時移動すると云ふ事を意味して居るので、吾々は全く外物に左右されるのであります。

文明藝術の職分

藝術には元來どう云ふ役目があるかと云ふ事を、第一に作家の立場から云つて見れば、藝術の直接の効果は、自分を壓迫して居る情緒騷を、少くとも一時弛緩(又は卸荷)させると云ふ點にあります。たとへば藝術家が色彩なり、大理石なり、言語なりに自分自身を移し、自分をこれに打ち込んでしまへば、彼は責任なり情

緒なりを、そう云ふ觸れ得べき客觀的事物に移したのであります。それ故藝術家は、その情的經驗を取戻し度いと思ふ時には、自分の製作品に依て取戻すことが出來ますから、彼はその情緒を忘れても差支はありません。

第二の役目即ち鑑賞者の立場から云ひますと、藝術は新しい現象・新しい心像・新しい感情新しい思想を鑑賞者に暗示するものであります。従つて鑑賞者が藝術品に没頭すると云ふ事は、其作品が或る新しい要素を紹介するからには、或方向に於て其人の生活を變化させる筈であります。別言すれば藝術品は鑑賞者に代理的經驗を與へるものであります。

第三の役目即ち社會的の立場から申しますならば、第一の役目で述べたやうな情緒の再現は、勿論作家にのみ限られて居るものではありません。斯の如き作家の個性なり經驗なりは、假令其作家が直接に公衆と接觸しないにしても、藝術品其物

に留まつて居て、これに依つて公衆に傳達されるのであります。従て藝術家と公衆との間には、社會的協力が行はれます。たとへば、一方に於て藝術家は、物を見て感じて、人の情緒を鼓舞するに巧みであり、又他の一方に於ては、公衆の或者は、その情緒を刺戟するに足るものを捉へ、且その結果を利用する力が、藝術家より勝れて居ります。猶例を擧げて申しますならば、士氣振興の呼吸を最もよく呑み込んで居つて、兵士を鼓舞する爲めに歌を作る人は、必ずしも兵を率ゐて連戦連勝を博する人ではありません。換言すれば、藝術家は必要な感情を刺戟しますけれども、其の感情を利用して戰に勝つには、藝術其外の軍略戰術が要ります。

もう一つの社會的の役目を申しますれば、藝術はたゞに感情を刺戟するのみならず、新活動をも刺戟するものでありまして、換言すれば藝術には慰樂的安息的の職分があります。日常の經驗の示す如く、仕事を換へる位利き自の多い休息はあり

ません。此の點から見て藝術品は、新しい計畫又は新しい暗示を以て心を充たし、以て外の活動から休息させるものであります。

原始藝術と近代藝術との職分の差

原始藝術に於ては、統率者の情緒的立場と、技術的立場とが、別々ではありませんでした。たとへば勇氣を鼓舞した舞踊は、同時に攻守の運動を示したもので、情想を起させる歌は、又、戦闘の法則を枚擧し、或は入用な武器を數へ擧げました。次のは濠洲の軍歌であります——

一

矛をもて額を突け、
矛をもて胸を突け、
矛をもて肝臓を突け、
矛をもて心臓を突け、
矛をもて腰を突け、
矛をもて肩を突け、

二

プアールの楯、棍棒よ矛よ、
持ち來れ、ペラールの投げ杖を、

プアールの楯ひろき擲げ木を。
帯を、房を、プアールの膝掛を。

起て！ 踏り出でよ！

眞直なる巨鳥の矛もて

あやまたずれらひ定めよ、

これを佛國の國歌の「マルセーユ」又は蘇國の「バンノックバーン」と比べて覽るのも、極めて興味のある事でありましやう——

汝自由の干等よ、目覺めて光榮に向へ

聞け！聞け！千萬のもの汝に起てと呼ばふな

いませしが干等、妻等、髪白き翁、

其の涙を見よ、其の叫びを聞け！

憎むべき虚主、傭兵と兇徒をつれて、

禍をはごくむ暴主に、

國內踏みにごられて已みなんや

平和と自由は、重傷負ひゆるゝひまに。

かつてはフランスと共に傷けるスコト人、
かつてはフランスを將と仰ぎしスコト人、
いで、來れ汝が血潮の床に、

さらすば勝利へ……

原始時代の歌の單純な點は措いても、此の二種

の歌の非常な差異は、第一に原始歌謠の客觀的、技術的性質と、近代の歌の主觀的、情緒的性質との間の對照であります。今掲げた歌の例の示す如く、未開時代の歌謠作者の數へ上げた細項は、實戰の時の運動を、一々心に留めさせる様に計つてあり、近代の歌は、たとへば子供等の涙とか叫びと云ふやうに、戰士の感情をたかぶらせて、その決心を固める様な内容を持つて居ります。第二の相異は自由・光榮・勝利の如き、一般的概念は近代の歌謠に特發のものでありまして、専門的教練に依て刺戟を利用する役目は近代科學に譲つて、近代藝術は、感情的且一般刺戟を起す事を、目的として居ると云へるのであります。此の點から見れば、獨逸の哲學者のヘーゲルの言の如く、藝術は本來普遍的なものを表現するものであります。

要するに文明藝術の職分は感情生活を敏活ならしめ、且それを擴大し一般化する點に在ります。而して此の職分も、究極は吾々の實際的活動に影響を及ぼすものでありますけれども、其の實際的結果との遠隔即ち道程の長さが、文明藝術と原始

藝術との本來の相異で、この道程は原始藝術は近く、文州藝術は遠いのであります。

一般的と云ふ事に就いて、もう少し述べて見ましやう。藝術の影響が一般的性質を帯びて來るに従つて、作品は個々の場合と關係が薄くなつて參ります。此の一般的刺戟とは如何なるものかに就ては、次の例に依て御話致しませう。例へば戰勝の記念像が大通りの角の廣場に立つて居るとしませう。通る人毎に、其の像を仰いで、感情の高まるのを覺えますが、併しその感奮の結果は、人毎に違つて居ります。軍人は更によく戰はん事を思ひ、音樂家は凱旋の曲を作らうと思ひ、學者は學問上の問題を解決せんとし、樵夫はもつと木を切らうと思ひ立つと云つた風であります。其の記念像が起させる斯様云ふ行爲は、その究極の一部ではあります。それが斯様までも細かく分かれ且最初から見抜かれないからには、寧ろ一般的に云ひ方をして、「其の彫像は勇敢にして勝利的な仕事をさせる様に刺戟する」と云つておくのが宜いと思ひます。